

植民地台湾における尺八家の活動: 佐伯頼山と曾倅山を中心に

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-03-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福田, 千絵, Fukuda, Chie メールアドレス: 所属:
URL	https://senzoku.repo.nii.ac.jp/records/2215

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



植民地台湾における尺八家の活動

—佐伯頼山と曾倅山を中心に—

The activities of *shakuhachi* masters in colonial Taiwan: Saeki Raizan and So Kōzan
植民地台湾における尺八家の活動 —佐伯頼山と曾倅山を中心に—

福田 千 絵
Fukuda Chie

1 研究目的

本研究は、植民地台湾で活動した尺八家に着目し、その音楽活動を考察することによって、植民地における邦楽の特色を明らかにすることを目的とする。これまで植民地台湾における邦楽の状況に関しては、ラジオ放送及び雑誌記事における邦楽師匠のデータ整理は行われているが（劉他 2018）、範囲が限られており、邦楽家の音楽活動を検討する個別研究は進んでいない。そこで、本研究は、事例研究として二人の尺八家を取り上げ、当時の雑誌及び新聞等を用い、植民地における邦楽家の特質を検討する。

植民地台湾には数十名の尺八家が確認できるが、本稿では、台湾人尺八家の曾倅山（生没年不詳）と、彼の師匠である日本人尺八家である佐伯頼山（1899- 没年不明）を中心に検討する。植民地台湾における邦楽界は、台湾の日本人コミュニティと内地との密接な関係性の中で形成されており、その中で尺八の准師範となった台湾人の曾は稀有な存在である。また、師匠の佐伯は、日本で育ち、台湾で就職し、職業と尺八教授を両立させて弟子を育てたが、これは多くの在台日本人師匠にも共通するであろう。曾に関しては、別の台湾人尺八家林吟風（1915-1970）に着目した研究（廖 2013）には新聞に基づくデータが整理されているが、本研究では日本人尺八家との関係に着目して考察する。

研究の資料は、日本語新聞である『台湾日日新報』（1898-1944）及び『台湾邦楽界』（1933-1935）、『三曲』（1921-1944）等の邦楽雑誌、尺八専門書の都山流史等を用いる。なお、引用時には、『台湾日日新報』は『新報』、『台湾邦楽界』は『邦楽界』、都山流文献については、『都山流史』『都山流七十年史』『都山流百年史』『都山流楽報』をそれぞれ『都山流史』『七十年史』『百年史』『楽報』と表記する。

2 尺八音楽

尺八音楽は、近世邦楽の一つに分類されるが、本来は禅宗の一派である普化宗において法器として修行に使用された。その際は独奏で演奏されていたが、江戸後期に地歌箏曲との合奏が行われるようになり、明治以後は、一部に本来の独奏のみの流派があるものの、中心は合奏を行う流派に移った。合奏を

行う流派には、琴古流と都山流、上田流、竹保流など、多数の流派がある（月溪 2008）。

2-1 植民地台湾の概況

植民地台湾では、領台当初は琴古流が主であったが、その後、都山流と上田流が進出し、上田流に至っては、内地の勢力図と比較して優勢であった。つまり、昭和初年頃までには、内地では琴古流と都山流が二分していたが、台湾では上田流を加えた3流が行われていた（福田 2015：25）。

2-2 都山流尺八の組織制度

本稿で取り上げる佐伯と曾は、都山流尺八家である。琴古流は江戸時代に始まっていたが、都山流は、1896年に初代中尾都山（1876-1956）が開いた。以下、制度と曲目及び台湾の状況について述べる。

都山は、昇格試験を定期的 to 実施し、厳格な試験制度に基づく階級を設けた。1911年の「都山流規定」では5階級であったが、17年の「都山流規程」では、奥伝の次に皆伝、師範の次に大師範が設けられ、初伝、中伝、奥伝、皆伝、准師範、師範、大師範という7階級となって現在に至っている（『百年史』301-302, 304）。この制度では、中伝修了時に雅号が授けられ、名取となり、准師範試験に合格すると、「山」の字を使用することが許された。当初、師範には都山流屋号である「竹琳軒」を冠することが許されていたが、17年の改正後は、大師範にのみ許されることになった（『百年史』304）。本稿で扱う曾倅山は准師範までしか確認できていないが、台湾で活躍した水原秋山と菅雪山は竹琳軒を称している^{注1}。佐伯頼山は、本稿で扱う期間では准師範であるが、後に大師範となった（『七十年史』327）。

都山みづからが全国を行脚し、試験や講習会、演奏会を実施したことは、全国に散らばる会員の意欲向上と制度維持に貢献していたといえるだろう。台湾についても、都山は1932年に訪問している。この時、都山は既に尺八の吹奏を止めていたが（森田 2021：212-213）、昇格試験と講習会を実施し（福田 2020：147-148）、演奏会では指揮を担当した（橋本 1932b：62）。

都山流のレパートリーは、都山が作曲した尺八独奏あるいは尺八のみの合奏（本曲）と、地歌に由来する合奏曲（外曲）が二本柱となっている。これらの曲目は、都山が考案した独自の記譜法によって記され、体系的な楽譜出版と試験制度によって段階的に教授された（月溪 2008）。このシステムによって、たとえ転居しても同じ制度の下で勉強が続けられた。昇格や名取の制度は琴古流や地歌箏曲の各会派でも行われていたが、都山流の場合、独自のレパートリーと楽譜、検定制度によって徹底されていた。

以上のように、都山流の組織及び制度は比較的明瞭であり、都山流で発行された文献を活用すれば植民地台湾における門人の活動を把握しやすいと考え、本稿では、台湾で活動した都山流の門人のうち、台湾人の曾倅山とその師匠である日本人の佐伯頼山を取り上げて検討する。

3 日本人師匠の活動：佐伯頼山

佐伯頼山は、20歳頃から30代半ばまで台湾で都山流尺八師匠として活動していた。台湾における都山流の草分け的存在で、ラジオ出演も多い。1930年頃までに関しては、『都山流史』（631）に詳しい。その他、本研究で得た情報を整理した稿末の資料1に基づき、活動、曲目、共演者の順に検討していく。

なお、佐伯頼山は、頻繁に転居を繰り返していた。資料1のう

図 1. 台湾の略地図



ち、転居のみをまとめると、仙台→台北 1919 →仙台 1921 →台北 1922 →高雄（旗山街）1922 →台北 1924 →北港 1925 →台北 1926 となる（図1参照）。さらに、『三曲』には26年の台北移転後の住居が詳しく報告されているので、それを表1に示す。

表1. 佐伯頼山の台北市内の転居歴

*『三曲』の彙報欄による。表の年月は『三曲』発行年月によるため、資料1とは若干の時期のずれが生じている。

『三曲』掲載年月	住所（転居先）	備考
(1926年2月)**	台南州北港街	**都山流創始三十周年の会員一覧より
1926年4月	①台北市北門町13へ	
1926年8月	②台北市大正町3の2（自宅） ③台北市榮町1の20へ（指南所）	
1926年12月	④台北市寿町1の8へ	
1927年4月	⑤台北市榮町四丁目十へ	
1931年4月	⑥台北市末広町1-18	
1931年10月	⑦台北市大龍洞町一三八	12月にも同じ記述あり。

1926年と31年は、短期間に転居を繰り返していた。①北門町から⑥末広町までは繁華街あるいは日本人が多い地域であったが、最後の⑦大龍洞町は、台湾神社に近い台北市北部であった。その後、『台湾邦楽界』創刊号（1933年5月）でも同じ住所が記載されている。

3-2 演奏曲目（佐伯）

佐伯のレパートリーについては、都山流の曲目が中心となるが、地歌の合奏曲も演奏しており、当時の先端の楽曲である新日本音楽も手掛けていた。具体的には、1923年6月16日の高雄支部開設披露演奏会及び24年11月16日の台北へ戻った直後の演奏会、25年12月13日の忘年会で演奏されている曲が、佐伯が指導し、会員が習得する曲目と見てよいだろう。この3日間の曲目は表2の通りである。都山流本曲に下線を引いた。

表2. 臺灣楊琳會のレパートリー

・1923年6月16日

八千代、鶴の声、巖上の松、茶音頭、金剛石、松の寿、千鳥の曲、若葉、磯千鳥、春の曲、霜夜、四季の詠、春の光、六段、明治松竹梅、楫枕

・1924年11月16日

若葉、椿尽し、三の景色、ままの川、けしの花、霜夜、八重衣、新曲百千鳥（川井作曲）、湖上の月、銀世界、夜々の星、夜の懷、明治松竹梅、寒月

・1925年12月13日

八千代、椿尽し、金剛石、里の暁、巖上の松、湖上の月、黒髪、千鳥の曲、茶音頭、磯千鳥、今小町、夕空、長良の春、さむしろ、比翼蝶、摘草、楫枕、六段

四

いずれも都山流本曲で開幕し、地歌の曲目が続く中、本曲が2～3曲盛り込まれていた。地歌箏曲の楽曲は、現在でも演奏頻度の高い曲である。当時としては比較的新しい、明治新曲も含まれていた。資料1の他の演奏曲も含めた佐伯のレパートリーは、表3のようにまとめられる。

表3. 佐伯楊山の演奏曲目

*数字は作曲年。曲種分類及び作曲年は、尺八は『百年史』、地歌と箏曲は『地歌箏曲研究』（久保田 2011）等を参照。
 *資料1の曲目を列挙したが、1933年5月28日中和楊琳會は曾倅山の演奏曲目と捉え、本表には含めていない。

〈都山流本曲（初代中尾都山作品）〉青海波 1904、霜夜 1905、春の光 1907、寒月 1911、若葉 1913、潮風 1914（金森高山作曲）、八千代 1916、夜の懷 1917、朝緑 1921、湖上の月 1922、木枯 1923、比翼の蝶 1924（初代森川龍山作曲）、海辺の夕映 1925、紅葉 1930
 〈段物（箏曲）〉六段
 〈端歌（地歌）〉鶴の声、黒髪、七草
 〈手事物（地歌）〉茶音頭、椿尽し、さむしろ、松の寿、磯千鳥、四季の詠、楫枕、里の暁、今小町、長良の春、夕空、三つの景色、梅の宿、夕顔、神楽初、八重衣、残月
 〈山田流箏曲〉松上の鶴 1902
 〈幕末新箏曲（箏曲）〉千鳥の曲、春の曲
 〈明治新曲（箏曲）〉明治松竹梅 1902、金剛石 1903、巖上の松 1904、摘草 1907、銀世界 1908
 〈新日本音楽〉《春信幻想曲》（町田嘉章作品）1925
 〈その他（川井良都作品）〉百千鳥 1924、来む春 1926

都山流本曲は14曲演奏しており、そのうち、複数回演奏しているものは、《八千代》《寒月》《若葉》《湖上の月》《木枯》であった。《紅葉》は比較的新しい年代の作品であるが、初代中尾都山の來台時に演奏しているので、門人たちの合奏に混じったものと思われる。地歌箏曲は、広く演奏されている曲がほとんどである。《六段》のような初学者向けの曲は尺八の手ほどきとしても使用されているが、多くの曲は、共演者の地歌箏曲師匠のレパートリーに拠ると思われる。共演の多い川井良都は生田流箏曲の師匠であり、端歌や手事物などの古典的な地歌箏曲の楽曲をレパートリーとしていたことがうかがえる。新日本音楽の《春信幻想曲》は、都山の來台時の演奏会で演奏された。

なお、都山の來台に伴い、1932年1月6日及び7日は台北、10日には台南で講習会が開催された（『百年史』832）。台北の講習会の曲目は、《新暁》《こほろぎ》《春曙夢》《紅葉》《玉の台》《木枯》であった（橋本 1932a : 62）。『楽報』の記事では佐伯も曾も講習会前後の日程に参加しているので、講習会も受講したと推測される。

3-3 共演者（佐伯）

都山流尺八では、尺八独奏曲である本曲を複数人で合奏することがあり、また、地歌箏曲の曲目は箏三弦の師匠と合奏する。共演者はある程度、固定化されているので、共演者によって佐伯と曾の活動範囲を知ることができる。佐伯の場合、本曲を共演する尺八家は、自分の門人が多かった。例えば、1929年2月13日のラジオ放送では、都山流台湾楊琳會の、佐伯頼山、中川頼仙、曾頼州、石井頼静、志摩頼風、中濱頼童、浦野頼祥、原田頼邦、総勢8名が出演している^{注7}。全員の名前に「頼」の字があることから、彼らは楊琳會の会員であり、佐伯の門人である。このように、ラジオ放送の1曲の合奏を会員のみで構成できるということは、実力を持つ門人がそろっていたと考えてよいだろう。彼の活動の最終年には、曾倅山と共演している。門人については次章で詳しく検討する。

なお、1924年11月16日の台湾楊琳會及び25年6月23日のラジオ放送に出演している赤木江華については詳細不明である。赤木は、25年2月1日に台北の三井倶楽部で演奏会を主宰し、都山流本曲の《八千代》《朝緑》《比翼の蝶》《霜夜》《寒月》、その他、地歌箏曲の曲を演奏している。主催演奏会で都山流の楽曲を多く演奏しているが、都山流の名取ではなく、佐伯との関係も不明である。

また、共演者から他の師匠とのつながりも分かる。1929年8月7日のラジオ放送では、同じ都山流幹部である水原秋山と佐伯の二人で合奏している。水原は、門弟の指南免許披露を水原の門弟と共に開催し、佐伯が北港から台北へ戻る際には門人を引き継いでおり、台湾在住の都山流師匠の中でも関係が密接だったのかもしれない。その他、同じく台北で師匠をしていた三原峯山との関係も指摘できる。31年4月25日の川井良都の会では楊琳会と友琳会が共演しているが、友琳会は三原の社中である^{注8}。

さらに、宗家初代中尾都山の來台時には、都山流幹部との結びつきも見られる。この時は、井上黄山と橋本暁山が同行し（百年史832-833）、1月5日～1月23日に及んだ（福田2020）。1月17日のラジオ放送には、井上黄山、菅雪山、三原峯山、橋本暁山、佐伯の他、佐伯の門人である中川、志摩、そして、船田基山や水原秋山の門人も参加している^{注9}。曲目は、1.《紅葉》、2. 新日本音楽《こすもす》《嘆き給ひそ》《初便り》、3.《春信幻想曲》であり、佐伯は1と3に参加した。

箏三弦の師匠については、もっぱら川井良都とその門下と共演した。川井良都は、生田流の地歌箏曲師匠である。1923年11月4日に渡台開軒十周年記念演奏会を開催している（『新報』1923年11月3日）、13年頃から指導していたことになる。琴古流、都山流の各師匠と共演し、ラジオ放送には43年まで出演が確認できる。門下生の川上静子は24年4月13日に大史導を許され、披露演奏会を開いた（『新報』1924年11月12日）。翌年、佐伯の門人の指南披露の時に出演している。

4 佐伯頼山の門人—台湾人尺八家の活動：曾倅山

佐伯の門人は、台北だけでなく高雄や旗山、北港にも門人がいた。その中で、「頼」の字を冠しているのが、中伝まで修めた佐伯の門人である。名取の門人は、表4のように10名確認できる。

表4. 佐伯頼山の門人

*本表は、台湾日日新報のラジオ欄を参照して作成しており、資料1及び資料2の出演記録と重複する。例外は、中川頼仙と中濱頼童の1929年1月の記録で、三原峯山（周嶺、寶映）と和洋合奏のラジオ放送に複数回出演したものである。
*番号は、便宜上、記録の初出順に付したものである。

番号	竹名	改名について	初出記録	最終記録
1	菊地風啊	1925年3月指南免許	1925年3月	
2	志摩涵山（頼風、風懷）	1925年6月は風懷、1929年2月から1932年1月までは頼風、1932年6月以降は涵山	1925年6月	1932年6月
3	中川惟山（頼仙）	1929年2月から32年1月までは頼仙、1933年7月以降は頼山	1929年1月	1939年10月
4	曾倅山（頼州）	1929年2月から30年11月までは頼州、1932年6月以降は倅山	1929年2月	1939年11月
5	石井頼静		1929年2月	1929年6月
6	中濱頼童		1929年1月	1936年12月
7	浦野頼祥		1929年2月	1929年6月
8	原田頼邦		1929年2月	
9	森本頼城		1929年6月	
10	近藤頼雪		1930年11月	

以上の10名のうち、初期の弟子とみられるのが、菊地と志摩である。菊地については、「今回宗家より指南免許を受けたので（『新報』1925年3月22日「尺八演奏会」）」披露演奏会が開催されたということのみで、その後は不明である。このとき、佐伯はまだ佐伯楊風と名乗っており、その「風」の字を授かっている。また、志摩は、当初、風懷と名乗っており、佐伯が頼山と改名したのと期を同じくして頼風と改名している。師匠の改名前後の両方の名から1字ずつ授かっているとみることができる。

楊風会で活動が活発だったのは、志摩、中川、曾、中濱である。中川と曾は、准師範に昇格し、山の字を授かっている。1932年の宗家の來台時に佐伯は『楽報』に手記を寄せ、共に宗家を歓迎した会員として、志摩頼風と中川頼仙、曾頼洲の名を挙げている。曾は、33年5月に中和楊琳会の主宰者として第1回演奏会を開催している。また、中濱は31年には中川と共に複数回、ラジオ出演している。

4-1 活動（曾）

佐伯の門人は、前述のように10人が確認できるが、このうち、台湾人尺八家である曾に着目する。『新報』『邦楽界』『三曲』、都山流文献を精査して活動歴を整理した資料2に基づいて述べていく。曾倅山の詳しい経歴は不明であるが、佐伯は、1922年12月から台北で指導を開始し、一時高雄や北港に転居するも、26年以降は台北に定住した。したがって、曾の入門の時期は、22年12月以降と考えられる。

曾のもっとも古い記録は、曾頼州の名でラジオ放送出演が報じられたものである。これは、1929年2月13日の台北からのラジオ放送で、前述の通り、楊琳会の会員がそろって出演した回である。曾は、会員に混じって、都山流本曲《若葉》の第2パートを他の名取と共に演奏した。竹名は、30年11月24日までは曾頼州、32年6月19日以後は曾倅山である。この間、初代中尾都山の來台に伴い、准師範検定試験が実施されたので、その際に准師範に昇格し、新しい雅号を使用し始めたのではないだろうか^{注10}。また、この時には、通訳として台湾音楽を紹介し、都山を喜ばせたという^{注11}。

1932年以降は39年まで毎年数回ラジオに出演している。33年5月には、中和楊琳會を主宰し、演奏会を開催した。これは、曾の主宰する会とみられ、独立の第一歩であると考えられる。33年までは佐伯と共演、その後は地歌箏曲との共演で尺八家としては単独であることが多いが、36年には水原秋山、菅雪山ら、台北幹部と共に都山流本曲《青海波》を演奏している。

1932年以後、水原秋山に関連した新しい動きがみられる。32年10月には水原の台北転任披露の会で佐伯と共に出演し、翌年5月には、水原の主宰する紅葉會の企画による谷狂竹の話を聞く会に佐伯や中川と共に参加し、7月、8月には都山流台北幹部會に同門の中川と共に参加している。

4-2 共演者（曾）

ラジオ放送の共演者を見ると、兄弟弟子との共演が見られる。頼州時代には、中川頼仙、石井頼静、志摩頼風との共演が複数回ある。倅山となつてからは、志摩涵山、佐伯頼山と共演している。特に、佐伯の活動の最終年には、曾倅山と2人での演奏が複数回行われており、信頼されていたことが伺える。

箏三絃は、川井良都、中村辰男との共演が多い。中村辰男は、「川井門下の逸材」と称されており（筆者不詳1933）、台湾民謡など古典的な地歌箏曲以外の曲目の演奏も行っている。

4-3 演奏曲目 (曾)

ラジオ放送の曲目及び中和楊琳会の曲目を曾のレパートリーとしてまとめると、表5のようになる。

表5. 曾倅山の演奏曲目

〈都山流本曲〉青海波 1904、寒月 1911、若葉 1913、潮風 1914 (金森高山作曲)、湖上の月 1922
〈段物 (箏曲)〉六段
〈端歌 (地歌)〉黒髪
〈手事物 (地歌)〉磯千鳥、梅の宿、松の寿、長良の春、里の暁、夕空、夕顔、けしの花、楫枕、春の宵
〈幕末新箏曲〉新雪月花、夏の曲、冬の曲
〈明治新曲〉明治松竹梅 1902、金剛石 1903、巖上の松 1904、摘草 1907、稚児櫻 1911、吉野天人の曲、鶴亀の曲、松の栄
〈新日本音楽〉秋の調 1920、清水楽 1925、小鳥の歌 1928 (以上、宮城道雄)、春の宵 (久本玄智)、箏曲童謡
〈その他〉君が代、蕃界警備の歌

全体として師匠の佐伯と重なる曲が多い。都山流本曲について、演奏が確認できた数は5曲のみで佐伯より少ないが、新日本音楽及びその他が多くなっている。中和楊琳會を設立した際の演奏会でも、都山流研究会の典型的な曲目であり、特に台湾らしい曲は認められない。

5 まとめ

本稿では、植民地における邦楽の特色を明らかにする目的で、植民地台湾で活動した二人の尺八家の活動を検討した。その結果、日本人師匠である佐伯頼山の活動は次のようにまとめられる。1919年から34年まで、台湾を生活の基盤とし、尺八の教授活動をしていた。特に、三曲界のさまざまな行事、団体に参加した33年頃が活動の頂点であったとみられる。佐伯は、台北での都山流開拓を志し、研究会として楊琳會を設立し、支部を広げていった。勤務の都合で島内を数回移動したが、そのたびに門人を増やし、最終的に10名の准師範を輩出した。正式な指南免許は、いったん帰郷して取得したが、新曲の習得は渡台後も続けていた。本研究では、都山流本曲14曲を演奏したことが明らかであった。その中には佐伯の渡台後に作曲された新しい曲も含まれる。その他、地歌箏曲の一般的な曲目に加え、現地の地歌師匠の新曲も演奏した。他の都山流幹部との関係については、宗家の來台時や雑誌『台湾邦楽界』の企画などでは台北幹部として協力した。特に水原秋山は、佐伯の台北移転の際には佐伯の門人を引き継ぎ、自らの台北移転の際には佐伯の一門が披露演奏会に協力するなど、親しい関係性がうかがえた。

八

以上のように、佐伯の台湾での尺八活動は、レパートリーを増やし、多くの門人を排出し、台北の都山流幹部として順調であったように思われる。植民地という日本人にとっての新天地で存分に指導力を発揮し、都山流の裾野を広げたといえるであろう。

一方、佐伯の門人の曾倅山の活動には次のようにまとめられる。佐伯の他の門人と共に演奏活動を始めたが、後に佐伯と2人でのラジオ出演が増え、最終的に佐伯から独立し、楊琳會の支部となる中和楊琳會を設立した。内地に行った形跡は認められないので、台湾で佐伯の指導の下、楽曲を習得し、昇格したとみられる。レパートリーは、都山流本曲5曲の演奏が確認できた。佐伯の演奏曲目に加え、新日

本音楽のような大正末年からの新曲や台湾音楽に由来する曲も演奏した。曾は、日本人の門人である中川惟山と同じかそれ以上の活躍を見せていた。そして、宗家來台時に通訳として台湾音楽を紹介し、ラジオ放送で台湾民謡を尺八で演奏した。しかし、その他は、台湾人としての特別な活動はみられない。主宰の中和楊琳会の演奏曲目も特に台湾らしい要素はなく、むしろ典型的な都山流の研究会となっていた。現代であれば、自分のルーツの要素が入っていても不思議はない。この点については、日本人への同化の性格が認められるとってよいかもしれない。

以上の二人の活動から、植民地台湾としての特色は、次のように指摘できる。まず、島内での頻繁な移動である。これには、兼業の師匠であることが背景にあり、また、転居によって新しい門人の育成や他の幹部との連携も生じた。日本人師匠の移動や門人の引き継ぎは、都山流だけでなく琴古流や上田流でもみられ、地歌箏曲でも事例がある。植民地の限られた人材の中で、自然に行われていたことなのであろう。その一方で、琴古流や上田流との交流はみられず、共演する地歌箏曲の師匠も限られている。台湾の三曲界には多くの三曲家がいるが、普段の活動は限られた範囲で行われていたと思われる。

次に、内地との関係性が指摘できる。佐伯は、一時帰郷した折に正式な指南免許を取得し、曾は宗家初代中尾都山の來台時に昇格したとみられる。また、宗家の來台は、佐伯と曾にとっての特別な出来事の一つであった。他の幹部と共に歓迎行事を遂行しており、曾は検定試験を受験したと推測される。宗家にとっては、植民地台湾で自流を広げる絶好の機会であるが、見方を変えれば、現地の若手にとってはキャリアアップのまたとない機会であり、台湾の都山流会員が交流する良い機会になったと思われる。

その後、佐伯は1934年以降の活動が不明である。40年以降は資料が乏しいこともあるが、ラジオ放送にも出演記録がなく、何らかの理由で活動を中断したと思われる。島内の頻繁な移動や突然の内地への帰郷なども中断の理由になり得るだろう。一方、台北都山流幹部として同時期に活動していた水原や菅は、流派を超えた取り組みである台北尺八専門家協会に参加し、その後、台湾都山流の最高幹部になり、40年代に結成された台北三曲協会でも重要な役割を担った。水原や菅の活躍を見ると、佐伯にも同じような活躍の可能性があると思われるが、そうはならなかった。曾に関しても、39年以後の活動が不明である。戦況が激化し、活動に影響があったのかもしれないが、詳細は不明である。佐伯と曾の周辺について、今後も調査を継続したい。

本研究において、佐伯と曾の活動の主要な部分を再構成するために、新聞・雑誌、都山流の文献が欠かせなかった。それに関して、台湾日日新報及び曾について台湾大学の王櫻芬先生、都山流の文献について都山流尺八楽会理事長森田柊山先生のお力添えをいただいた。この場をお借りしてお礼申し上げる。

九

注

- 1 水原秋山は、1894年大阪生まれで、1922年に既に大阪で大師範となっていた。23年に台湾に渡り、28年10月に竹琳軒に昇格し、32年に台北に移るまで、台南を中心に活動した。没年不詳。菅雪山は1886年大阪生まれ。1910年に台湾で就職し、佐伯とほぼ同時期の19年10月に中伝を修了し開軒、37年2月に竹琳軒に昇格。45年に引き揚げ、46年に逝去（『百年史』別冊『名鑑』他参照）。
- 2 「當時臺北は當流未開の地にて中傳以上修了の者某々二氏あるのみ、他は總て琴古流にて尺八と言へば琴古流を指すもの、如く一般に思惟せられつゝある状態を概し、君決然中傳修了の身を以て當流開拓を思立ち都山

- 流尺八研究会として臺北楊琳會を組織し、教授の傍ら當流の宣傳に着手（『都山流史』631）」
- 3 「定刻に至るや先づ（豫て私が先生歡迎用として特に工場に命じて製作させた）「臺灣爆竹」に點火し、其勇壯なる大小幾多連續の閃光爆聲裡に宴は開かれた。」（佐伯 1932：66）
 - 4 『台湾邦楽界』2号：1（1933年）の「祝發刊 臺北都山流幹部會」として、次の12名がイロハ順で掲載されている。尾崎喚山、河合交山、川上秋仙、玉置萱山、曾倅山、中川惟山、佐伯頼山、水原秋山、三原岑山、志摩涵山、菅雪山、末永鷄山。水原の門人は河合と川上、佐伯の門人は曾、中川、志摩。
 - 5 台北尺八専門家協會は、流派を超えて尺八の專業師匠5名で結成した会。佐伯は專業ではなかったので参加しなかったのだろう。
 - 6 台北好樂家協會は、琴古流尺八家吉田晴風の來台を期に結成され、40名以上の三曲師匠が参加した。
 - 7 この記事は印刷不鮮明だったため、廖の記述及び『台湾日日新報』検索サイトの活字を参考にした。
 - 8 三原岑山は、佐伯よりも7年年長で、1919年から台北に居住しており、23年に皆伝後、三原周嶺と称し指南を始めた。30年6月に准師範となり、岑山と改名した。
 - 9 船田は最初琴古流、後に都山流に転じた尺八家。夫人は、地歌の師匠として門人を多く残した船田さく。1918年にきくと基隆で結婚し、30年9月に東京へ移住し、44年に逝去した（船田 1974）。
 - 10 1932年1月17日に台北市教育會館で臨時准師範検定試験が実施され、末永雞山外21名が合格した（『百年史』843）。曾倅山、志摩涵山、中川惟山もこの時昇格したと推測できる。
 - 11 「（歡迎会で）其間樂師の奏する臺灣音楽は特有の一種哀調を帶び藝姐の唄ふ歌、之れに和して南國の情緒を十二分に味ひ、更に曾頼洲君を通譯さして臺灣音楽を宗家ご自身御註文せらるゝ、等殊の外御満悦に見受けられた。」（佐伯 1932：67）

参考文献

<単行書・雑誌等>

- 久保田敏子（編）2011 『地歌箏曲研究<楽曲編 上・下>』京都：京都市立芸術大学 日本伝統音楽研究センター。
- 佐伯頼山 1932 「宗家の臺灣入り」『都山流楽報』273号：66-67.
- 月溪恒子 2008 「第16章 尺八楽」*in* 小島美子（監修）国立劇場（企画・編集）『日本の伝統芸能講座』京都：淡交社：383-411.
- 都山流編輯部（編）1932 『都山流史』京都：都山流宗家.
- 都山流史編輯委員会（編）1970 『都山流七十年史』京都：都山流尺八楽会.
- 都山流百年史編輯委員会（編）1998 『都山流百年史』京都：都山流尺八楽会.
- 橋本曉山 1932a 「宗家随行臺灣旅行日記」『都山流楽報』273号：58-62.
- 1932b 「宗家随行臺灣旅行日記（二）」『都山流楽報』274号：64-68.
- 1932c 「宗家随行臺灣旅行日記（三）」『都山流楽報』275号：55-59.
- 福田千絵 2015 『近代日本の伝統音楽における演奏の場についての実証的研究：箏曲演奏会を中心に』（平成23～26年度科学研究費助成事業研究成果報告書）.
- 2020 「邦楽家による植民地台湾への演奏旅行一尺八・地歌箏曲を中心に」『比較日本学教育研究部門研究年報』138-152.
- 船田喜久 1974 『恩師長谷檢校を偲ぶ 芸の道七十年のあれこれ』東京：船田喜久.
- 三角乾山 1932 「臺灣片々」『都山流楽報』280号78.
- 紅葉會の一員 1932 「臺北轉任水原秋山師披露演奏会」『都山流楽報』282号98.
- 森田柊山 2021 『中尾都山伝』京都：都山流尺八楽会.
- 劉麟玉；徳丸吉彦；小塩さとみ；福田千絵 2018 『日本伝統音楽の越境—植民地台湾における「邦楽」の伝承—』（平成27～29年度科学研究費助成事業研究成果報告書）.

廖晴園 2013 『日治時期臺灣尺八音楽活動初探—以尺八の普及（1933-1937）與臺人尺八家林阿發為中心』國立臺灣大學文學院音樂學研究所碩士論文。

筆者不詳 1933 「指南所巡り（三）」『台湾邦楽界』3号15.

<新聞・雑誌>

『台湾日日新報』1898-1945（台湾日日新報音声文化データベース

http://sound-culture.infolinker.com.tw/login_soundculture.htm 2021年8月25日最終アクセス）

『台湾邦楽界』1933-1935（台北：台湾大学所蔵）

『三曲』1921-1944（筆者蔵）

*本研究はJSPS 科研費JP18K00128の助成を受けたものである。

資料1. 佐伯頼山の活動履歴 *資料2との重複あり。右欄には典拠を示す。

1899年3月7日	仙台生まれ。本名は佐伯盛【仙台】	都山流史 631
1917頃	普化宗（琴古流）日野湖月に入門	都山流史 631
1918年1月	細田楊山より初伝	都山流史 631
1919年9月	中伝。佐伯楊風に改名	都山流史 631
1919年10月	台北市某商店入店渡台【台北】	都山流史 631
1919年	台北楊琳会を組織	都山流史 631
1921年4月	病のため辞職帰国【仙台】	都山流史 631
1921年12月	奥伝	都山流史 631
1922年1月	指南免許	都山流史 631
1922年	渡台。台北市にて正式に指南を開始【台北】 * 12月と記述されているが、もっと早い時期と思われる。2月ヵ。	都山流史 631
1922年8月	鉄道部購買組合書記	都山流史 631
1922年11月	高雄物品分配所に転勤。旗山街に出張稽古所開設。	都山流史 631
1923年6月16日	楊琳会支部尺八演奏会@高雄湊館（開設披露）【高雄】 「佐伯楊風氏の主催で十六日午後五時より高雄湊館に楊琳会支部開設披露の為め都山流尺八演奏大会を開く由」 〔曲目〕本曲八千代、鶴の声、巖上の松、茶音頭、金剛石、松の寿、千鳥の曲、本曲若葉、磯千鳥、春の曲、本曲霜夜、四季の詠、本曲春の光、六段、明治松竹梅、楫枕	新報 1923-6-16 三曲 1923年7月
1924年7月	購買組合を辞職	都山流史 631
1924年（7月）	台北市へ。台湾楊琳会【台北】	都山流史 631
1924年11月	台湾爆竹煙火会社に入社	都山流史 631
1924年11月16日	台湾楊琳会@台湾鉄道ホテル 〔曲目〕一部：若葉、椿尽し、三の景色、ままの川、けしの花、霜夜、八重衣 二部：新曲百千鳥（川井作曲）、湖上の月、銀世界、夜々の星、夜の懷、明治松竹梅、寒月〔出演〕赤木江華、志摩風懷、佐伯楊風外 箏三弦：川井検校、山本勾当（高雄より）	三曲 1924年11月 新報 1924-11-14 新報 1924-11-15
1925年2月8日	仙台同郷会@栄座 「会員佐伯氏の尺八琴の合唱」他に、新生劇、時代劇、手品、さんさ時雨	新報 1925-2-8
1925年3月21日	敬老慰安演芸大会@栄座 「内台七十五歳以上の老人を主賓として敬老慰安演芸大会を芳野操氏の斡旋により復興社臺灣総支局主宰で催はす」 〔備考〕（三曲合奏）佐伯楊風指導 他に筑前琵琶、浄瑠璃	新報 1925-3-21
1925年3月21日	尺八演奏会@台南公会堂 〔備考〕弟子の指南免許披露 〔出演〕尺八：水原秋山、大津秋芳、大山秋詠、菊地風咽、川上、藤井、竹内 箏三弦：脇本、加納	新報 1925-3-22

1925 年 6 月 20 日	ラジオ放送 〔曲目〕摘草〔演奏〕箏：橋本幸子、川上大史導、川井大検校 尺八：佐伯頼風	新報 1925-6-20
1925 年 6 月 23 日	ラジオ放送 〔曲目〕寒月〔出演〕尺八：志摩風懷、佐伯楊風、赤木江華	新報 1925-6-23
1925 年 7 月	台湾爆竹煙火会社北港工場へ転勤【北港】	都山流史 631
1925 年 9 月 23 日	新聞記事「音楽師匠家」（佐伯楊風、舟田周道、元宗祖風）	新報 1925-9-23
1925 年 12 月 13 日	台湾楊琳会台北本部忘年会@栄町大同会事務所 〔曲目〕八千代、椿尽し、金剛石、里の暁、巖上の松、湖上の月、黒髪、千鳥の曲、茶音頭、磯千鳥、今小町、夕空、長良の春、さむしろ、比翼蝶、摘草、楫枕、六段〔備考〕「佐伯楊風氏の創設にかゝり邦楽発達のため尽瘁した臺灣楊琳會臺北本部」	新報 1925-12-13
1926 年 (1 月)	半年で門人 20 名	都山流史 631
1926 年 (1 月)	門人を水原秋山へ託す	都山流史 631
1926 年 1 月	台北本社復帰【台北】	都山流史 631
1926 年 3 月 10 日	台湾楊琳会@台湾日日新報社楼上 〔曲目〕本曲朝緑、七草、松上の鶴、長等の春、金剛石、改訂夕顔、来む春（川井作曲）、本曲海辺の夕映、三の景色、神楽初、改訂春の曲、本曲木枯、四季の詠、本曲青海波〔出演〕佐伯楊風外	三曲 1926 年 4 月 新報 1926-3-9
1926 年 7 月	准師範。累次の功勞銀盆及び奨励金受領。佐伯頼山と改名。	都山流史 631、 百年史 312
1927 年 1 月	「佐伯頼山師 楊風を頼山と改號」	三曲 1 月 79
1927 年 5 月 31 日	「ウエルカム 都山流佐伯先生の住所しりたし（尺八生）」（通信欄）	新報 1927-5-31
1929 年 2 月 13 日	ラジオ放送「都山流尺八」 〔曲目〕若葉〔出演〕都山流臺灣楊琳会佐伯頼山 一部：中川頼仙、曾頼州、石井頼静 二部：志摩頼風、中濱頼童、浦野頼祥、原田頼邦 〔曲目〕湖上の月〔出演〕一部：志摩頼風、中川頼仙 二部：佐伯頼山、中濱頼童	新報 1929-2-13
1929 年 6 月 8 日	ラジオ放送「二曲合奏」 〔曲目〕海の宿〔出演〕尺八：佐伯頼山、志摩頼風 三弦：川井良都	新報 1929-6-8
1929 年 8 月 7 日	ラジオ放送 〔曲目〕湖上の月〔出演〕一部：水原秋山 二部：佐伯頼山〔備考〕他に《木枯》水原秋山	新報 1929-8-7
1930 年 12 月 19 日	台湾楊琳会 連合納会@北投 小塚商店	新報 1930-12-19
1931 年 4 月 25 日	春季箏曲大演奏会@台湾日日新報社大講堂 〔出演〕川井良都師、台湾楊琳会、台湾琳友会 * 佐伯と曾の名前は明記されていないが出演していたと思われる。	新報 1931-4-25
1931 年 6 月 4 日	「吉田晴風氏来臺を機に台北邦楽家連盟成る」	新報 1931-6-4
1931 年	銀杯授与	百年史 314
1932 年 1 月 17 日	ラジオ放送 〔曲目〕紅葉〔出演〕一部：井上黄山、菅雪山、三原岑山、中川頼仙 二部：橋本暁山、佐伯頼山、志摩頼風、末永史楓、森永基城 〔曲目〕春信幻想曲〔出演〕尺八一部：井上黄山、菅雪山、三原岑山、中川頼仙、川上秋仙 二部：橋本暁山、佐伯頼山、志摩頼風、末永史楓、森田基鳳 高三弦：山本登美代、小松美佐子 低三弦：田中春江 高箏：坂上住子、藤堂とま子、飯野綾子 低箏：鈴木時夫、山中壽々子、中村喜美子 〔備考〕他に《こすもす》《嘆き給ひそ》《初便り》	新報 1932-1-17
1932 年 6 月 19 日	ラジオ放送 〔曲目〕残月〔演奏〕箏：川井良都 三弦：前川イシ 尺八：佐伯頼山	新報 1932-6-19
1932 年 10 月 15 日	臺北轉任水原秋山師披露演奏会@台北市明石町警察会館 〔曲目〕朝霧、茶音頭、千鳥の曲、夜の唄、飛躍、吾妻獅子、寒月、春の宵、薤露調、秋の言の葉、楫枕、母の唄、雲のあなた、磯馴松、残月、海の幸〔出演〕尺八：水原秋山、佐伯頼山、中川惟山、志摩涵山、曾倅山 箏三弦：小川、川井、鈴木、坂上、楯原、坂本 洋楽家：山崎、林、張	紅葉會の一員 1932 より
1933 年 4 月 18 日	ラジオ放送 〔曲目〕湖上の月、寒月〔出演〕尺八一部：佐伯頼山、二部：曾倅山	新報 1933-4-18

1933 年 5 月 14 日	紅葉会月竝研究会@水原宅 *谷狂竹の話を聞く 〔参加者〕水原秋山、谷狂竹、水原門弟、佐伯頼山、河合交山、中川惟山、曾倅山	邦楽界 2 号 20
1933 年 5 月 28 日	都山流中和楊琳会第一回演奏会@同好会倶楽部 〔曲目〕六段、摘草、巖上の松、楫枕、春の宵、本曲若葉、金剛石、小鳥の歌、夏の曲、夕顔、清水楽、本曲潮風、けしの花〔出演〕尺八：曾倅山、佐伯頼山、中川惟山 箏三弦：川井社中	邦楽界 2 号 17
1933 年 6 月 13 日	寄稿「臺灣邦楽界の發刊を悦ぶ」	邦楽界 2 号 4
1933 年 7 月 1 日	ラジオ放送 〔曲目〕潮風〔出演〕尺八一部：佐伯頼山、二部：曾倅山 〔曲目〕木枯〔出演〕尺八：佐伯頼山	新報 1933-7-1
1933 年 7 月 8 日	都山流台北幹部研究会@水原秋山宅 〔来会者〕佐伯頼山、河合交山、中川惟山、曾倅山、水原秋山	邦楽界 4 号 24
1933 年 9 月 12 日	台北好楽家協会会員	邦楽界 5 号 14
1934 年 7 月 21 日	三曲納涼大演奏会@台北明石町警察会館 *次号のプログラムには佐伯・曾の記載なし 〔出演〕水原、菅、河合、佐伯、三原、玉置、末永、中川、曾倅山、他	邦楽界 11 号 12

資料 2. 曾倅山の活動履歴 *資料 1. との重複あり。右欄には典拠を示す。

1929 年 2 月 13 日	ラジオ放送 〔曲目〕若葉〔演奏〕都山流台湾楊琳会 尺八一部：佐伯頼山 二部：中川頼仙、曾頼州、石井頼静 三部：志摩頼風、中濱頼童、浦野頼祥、原田頼邦	新報 1929-2-13
1929 年 6 月 8 日	ラジオ放送 〔曲目〕摘草〔演奏〕都山流臺灣楊琳会 尺八：中川頼仙、曾頼州、石井頼静、浦野頼祥、森本頼城 箏：川井良都	新報 1929-6-8
1930 年 11 月 24 日	ラジオ放送 〔曲目〕明治松竹梅〔出演〕箏：川井良都、田中君子、中山喜世子、有馬光子、平君子、今野悦子 尺八：志摩頼風、曾頼州、近藤頼雪	新報 1930-11-24
1931 年 4 月 25 日	春季箏曲大演奏会@台湾日日新報社大講堂 〔出演〕川井良都、台湾楊琳会、琳友会 *佐伯と曾の名前はないが出演していたと思われる。	新報 1931-4-25
1932 年 6 月 19 日	ラジオ放送 〔曲目〕吉野天人の曲〔出演〕箏：中村辰男、今野悦子、志摩春子、川井良都 尺八：志摩涵山、曾倅山	新報 1932-6-19
1932 年 10 月 15 日	臺北轉任水原秋山師披露演奏会@台北市明石町警察会館 〔曲目〕朝霧、茶音頭、千鳥の曲、夜の唄、飛躍、吾妻獅子、寒月、春の宵、菫露調、秋の言の葉、楫枕、母の唄、雲のあなた、磯馴松、残月、海の幸〔出演〕尺八：水原秋山、佐伯頼山、中川惟山、志摩涵山、曾倅山 箏三弦：小川、川井、鈴木、坂上、楯原、坂本 洋楽家：山崎、林、張	紅葉會の一員 1932 より
1933 年 4 月 18 日	ラジオ放送 〔曲目〕湖上の月、寒月〔出演〕尺八一部：佐伯頼山 二部：曾倅山	新報 1933-4-18
1933 年 5 月 14 日	紅葉会月竝研究会@水原宅 *谷狂竹の話を聞く 〔参加者〕水原秋山、谷狂竹、水原門弟、佐伯頼山、河合交山、中川惟山、曾倅山	邦楽界 2 号 20
1933 年 5 月 28 日	都山流中和楊琳会第一回演奏会@同好会倶楽部 〔曲目〕六段、摘草、巖上の松、楫枕、春の宵、本曲若葉、金剛石、小鳥の歌、夏の曲、夕顔、清水楽、本曲潮風、けしの花〔出演〕尺八：曾倅山、佐伯頼山、中川惟山 箏三弦：川井社中	邦楽界 2 号 17
1933 年 7 月 1 日	ラジオ放送 〔曲目〕潮風〔出演〕尺八一部：佐伯頼山、二部曾倅山	新報 1933-7-1 邦楽界 3 号 22
1933 年 7 月 8 日	都山流台北幹部研究会@水原秋山宅 〔来会者〕佐伯頼山、河合交山、中川惟山、曾倅山、水原秋山	邦楽界 4 号 24
1933 年 8 月 13 日	第三回都山流幹部会研究会@水原秋山宅 〔出席者〕河合交山、曾倅山、中川惟山、水原秋山、諸氏	邦楽界 5 号 22
1933 年 10 月 4 日	紅葉会観月野外演奏会@台北新公園音楽堂 〔出演〕水原秋山、河合交山、中川惟山、曾倅山	邦楽界 5 号 21、22

1933 年 12 月 29 日	ラジオ放送 〔曲目〕君が代〔出演〕箏：室本雅子、富川芳子、大栗典子、佐藤房子 十七弦箏：中村辰男 尺八：曾倅山 隆笛：村山鶏眠	新報 1933-12-29
1934 年 6 月 30 日	ラジオ放送 〔曲目〕磯千鳥〔出演〕尺八：曾倅山、三味線：川井良都 箏：中村辰男 〔曲目〕鶴亀の曲〔出演〕尺八：曾倅山 箏：川井良都、中村辰男	廖 65
1934 年 7 月 21 日	三曲納涼大演奏会@台北明石町警察会館 ＊次号のプログラムには佐伯・曾の記載なし 〔出演〕水原、菅、河合、佐伯、三原、玉置、末永、中川、曾倅山、他	邦楽界 11 号 12
1934 年 10 月	祝一周年記念あいさつ「台北三曲研究会」 〔会員〕田村俊山、曾倅山、中川惟山、中村辰男、村岡吹山、末永鶏山	邦楽界 15 号 32
1935 年 4 月 6 日	ラジオ放送 〔曲目〕梅の宿〔出演〕三弦：川井良都 尺八：曾倅山 〔曲目〕松の栄〔出演〕箏：川井良都 尺八：曾倅山	新報 1935-4-6
1935 年 5 月 4 日	ラジオ放送「新日本音楽と三曲合奏」宮城道雄出演 〔曲目〕新日本音楽《清水楽》〔出演〕箏：中村辰男、吉丸房子 尺八：曾倅山 〔曲目〕三曲合奏《黒髪》〔出演〕箏：平野久、吉丸房子 三味線：中村辰男 尺八：曾倅山	新報 1935-5-4
1935 年 6 月 18 日	ラジオ放送「台湾民謡」 〔曲目〕蕃界警備の歌〔出演〕唄：宇根清一、竹の家竹彌 箏：中村辰男 尺八：曾倅山 三弦：望月藤枝 鳴物：望月社中	新報 1935-6-18
1935 年 7 月 4 日	ラジオ放送「子供の時間」 〔曲目〕箏曲童謡〔出演〕箏伴奏：中村辰男 尺八：曾倅山	新報 1935-7-4
1935 年 10 月 7 日	ラジオ放送「新日本音楽」 〔曲目〕秋の調〔出演〕箏：中村辰男 尺八：曾倅山	新報 1935-10-7
1935 年 10 月 10 日	ラジオ放送 〔曲目〕吉野天人の曲、夕空〔出演〕尺八：曾倅山 箏：有馬光子、三戸君子、川井良都	新報 1935-10-10
1936 年 10 月 1 日	ラジオ放送 〔曲目〕新雪月花〔演奏〕箏：三戸君子、川井良都 尺八：曾倅山 〔曲目〕松の寿〔演奏〕箏：三戸君子 三弦：中島幸子、川井良都 尺八：曾倅山	新報 1936-10-1
1936 年 12 月 11 日	ラジオ放送 〔曲目〕青海波〔出演〕尺八一部：水原秋山、河合交山、玉置管山、村岡吹山、中川惟山 二部：菅雪山、末永雞山、曾倅山、尾崎煥山、中濱頼童	新報 1936-12-11
1937 年 3 月 22 日	ラジオ放送 〔曲目〕長良の春〔演奏〕三味線：川井良都 箏：中山喜世子 尺八：曾倅山	新報 1937-3-22
1938 年 6 月 29 日	ラジオ放送 〔曲目〕磯千鳥〔出演〕箏：橋谷幸子 三弦：川井良都 尺八：曾倅山	新報 1938-6-29
1939 年 1 月 20 日	ラジオ放送 〔曲目〕里の暁〔出演〕箏：有馬光子、中山喜世子 三弦：川井良都 尺八：曾倅山	新報 1939-1-20
1939 年 5 月 4 日	ラジオ放送 〔曲目〕稚児櫻〔出演〕箏：川井良都、橋谷幸子 尺八：曾倅山	新報 1939-5-4
1939 年 11 月 5 日	ラジオ放送 〔曲目〕松の寿、冬の曲〔出演〕箏：川井良都 尺八：曾倅山	新報 1939-11-5